
九十九物語

キ之國屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

九十九物語

【Nコード】

N5681P

【作者名】

キ之國屋

【あらすじ】

齡十歳の少女は目を覚ますと狭い和室にいた。自分の名も元居た場所も何もかも忘れた少女は「帰りたい」との想い一心で、部屋の外へと足を踏み出す。

怠け者でやる気のない猫又と共に、人の世とは一味もふた味も違う九十九神の世を駆け回ることになった少女『七市』の行く末はどうなるのか。

人いない神々の世界で様々な出会い、別れの中で少女は少しずつ成長していく。

人と人間よりも人間くさい九十九神との交流と、ほんの少しのホラー風味な『七市』の七日間に渡る忌憚。

世迷い唄（前書き）

この作品は九十九神・八百万神・妖怪の定義が曖昧になっています。
ご注意ください

世迷い唄

彼の世と人の世は一衣帯水
清流を挟み隣り合う

流るる小川は鏡花水月のごとく其の全てを映しだす
彼の世に往きたくば暁の橋を渡るべし
人の世に戻りたくば陰の中より生まれいずるべし

世迷う者よ
忘れることなかれ
一蓮託生託した命を

世迷う者よ
忘れることなかれ
一期一会の出会い全ての命を

世迷う者よ
忘れることなかれ
願いと未来と光に満ちる汝の名を

忘れるな
汝の歩む道は己の名
其の道を照らすのは汝を想う人の名
道しるべとなるのは汝と共に歩む命の名

世迷い人
その歩を止めたくば

思い出せ

物語 其の一

遠い、遠い日のことだ。白い陽が辺りの木々を照らす。緑に透ける影が少女の顔の上で、さらさらと音を立てて揺れていた。

少女を囲っている新緑の葉々の上には、どこまでも伸びる空が広がる。雲ひとつない空には数羽の鳶が飛んでいるが、音もなく眠る少女はその高い声にも気づくはずがなかった。

やがて、少女は目を覚ます。

腰丈程ある草の布団から上半身だけを起こし、寝ぼけ眼を擦って小さく欠伸した。

きよろきよろと辺りを見回す。

次第に不安の色に陰った少女の顔だったが、ちょうど林と終わりの草原との境目から深呼吸をするような速さで、こちらに歩いてくる人を見つけると、その影も瞬時に吹き飛んだ。

少女は笑みを浮かべ、立ち上がり駆けだした。

そしてほんの滲んだ視界の中で両手を伸ばすあの人の胸へと飛び込む。

少女の物語が始まる。そんな刹那の時だった。

カコンという短い音が聞こえ、少女は目を覚ました。ずいぶんと眠っていたようだ。霞みがかかった意識の中で、体を起こした少女は小さく伸びをした。

肩辺りで切りそろえた黒髪を無意識のうちに整えた後、少女は自分の柔らかい手を握ったり、開いたりをぼおっと繰り返す。

齡十歳程度の外見の少女は、中性的な顔立ちなのも合わさってまだ女の香りは微塵もない。両手で包めそうな小さな顔の唇は、少し血の気を失っている。

「……ここは」

真っ黒のおかっぱ頭を、ポリポリ掻きながら少女は呟く。
初めての場所だ。

夕陽が障子を透かして部屋に入り、六畳程度の狭い部屋の半分以上を茜色に染め上げている。

そうでない場所。例えば部屋の奥にある床の間などは、一足先に夜が訪れているかのように薄暗く、掛け軸の水墨画も暗闇に溶けこんで、少女からはよく見えなかった。

「おやおや。起きたようだね」

しゃがれた声が隣で聞こえ、少女は驚いてひゃつと声を上げた。

ははは。と笑う声のする方向を見ると、朱色の着物を着て髪の毛が真っ白の老婆が一人、正座している。皺だらけの顔に、真っ黒のドンダリのような小さな目が二つ輝いている。

「驚かせてしまったかい、すまないね。ところで体でどこか不自由な処はないかい？」

「は、はい」

少女は反射的に頷いて見せる。突然のことだらけで、戸惑って遠慮する素振りを見せる少女だったが、それでも何か言いたげに老婆の方をちらちらと視線を送った。

「何かあるのかい」

「あの……ここはどこ？」

「ああ、そうだね。しごくまともな質問だ」

老婆はくしゃくしゃの顔にさらに皺を作り、うんうんと頷く。

「でも今は、お前はそれを知る必要はないさ。あと七晩過ぎたら自然とわかる」

血管の浮いた皮の剥げたぼろぼろの白い手で少女の頭を撫で、老婆は言う。

どこか突き放すような冷たい言葉だが、老婆の表情は柔らかいまままだ。少女は決して納得できないが、不思議と老婆に頭を撫でられると、心は静かになった。

「さあ、腹がすいたろう。婆があったかいご飯を持ってくるから、おとなしく待っておくんだよ」

音もなく立ちあがり、老婆はするすると障子を開ける。そして完全に締め切る一歩手前。そこでピタリと手を止め、僅かな隙間から少女を見た。

「いいかい。絶対に外に出てはいけないよ」

誰もいなくなった部屋に一人残された少女の耳に、やけに鋭い老婆の視線と最後の警告にも似た言葉が、耳に何度も響いていた。

夕闇迫る部屋に、一人残された少女は考える。

ここはどこなのだろうか。

老婆にも尋ねたように、このような静かすぎて寂しすぎる光景に見覚えはない。

また自分が着ている真っ白い着物にも、全く覚えがなかった。

しかし少女にはわからない。何がどうあるべきなのか。

私がいるべき場所は。私の着ていた服は。

そしてそれよりもっと重要な何かが、少女には思い出せないでいた。

「おやおやそんな顔してどうしたんだい。べっぴんさんが台無しだ」少女は驚いた。足音もなく部屋の前に立ち、障子を開く老婆にも当然驚いたのだが、それよりもいつの間にか茜色の陽が、部屋の中に存在していないことが何よりも少女を驚かせた。

部屋の中は真っ暗になっていた。まだ障子を弱々しく照らしている陽も、少女の前に立つ老婆の背に隠れ、部屋に入ることは許されない。

この時少女は初めて、背筋に得体の知れない寒いモノが走りぎゅっと両腕で自分の体を抱きしめた。

「少し寒いかい。布団を被っててもよかったのに」

返事をする代わりに、首を短く横に振る少女の言いようもない不安を感じたのだろう。老婆は膳を置くと、布団の横にある行燈にそ

つと火を灯した。

ぼんやりとした淡い灯が、茜よりも薄く少女の顔を染めた。

「折角ここに来たんだ。難しい顔しちゃ損だよ、損」

老婆はそう言ながら膳を少女の前に置く。赤と黒の漆塗りの膳の上には、白く輝く粥が湯気を昇らせてちらちらと揺れていた。

「さあたんとお食べなさい。子どもは遠慮するもんじゃないからね」
言いながら老婆は粥を差し出す。少女はごくりと喉を鳴らした。

思えばいつご飯を食べたのかも覚えていない。無意識のうちに箸に手を伸ばす少女に、老婆が笑みを浮かべたその時、何かの叫び声が障子の向こうで短く響いた。

同時にどたどたとやかましい音が近づいてきて、障子が乱暴に開かれる。

「お婆様！！^{うしおに} 牛鬼がまた暴れて酒宴がめっちゃめっちゃです。どうかご助力お願いします！」

「またかい。これで何度めだよ。いい加減あんたも学習しな」

「しかしこのままでは館ごと吹っ飛ばされてしまいますよ！」

ため息混じりに言い放った老婆に、右目に大きな痣を作った女は廊下に正座し、必死に食い下がる。

よほどの暴れっぷりなのだろう。遠くからは何か大きなものが碎ける音と、誰かの悲鳴が断続的に聞こえてくる。

老婆は再び大きいため息を吐く。そして箸を手を取ったまま固まっている少女に、何か惜しむような視線を送り、ほほ笑む。

「お前は気にしなくていい。粥を食べて、眠っていなさい。またじきに婆は戻ってくるからね」

そう言うと、老婆は女と連れ添って部屋を後にする。残された少女は当惑して老婆が去った方と、目の前の粥を見比べた。

どれだけ不安で胸が満たされても、やはり空腹には勝てない。

少女が粥に箸を伸ばしたその時、少女の頭上から甲高い声が降り注いだ。

「ほおおお！！ うまそうな人の子がいるぞ」

慌てて声のする方を見上げると、こちらに背を向けて天井に張り付いている猫の姿があった。ひどく興奮しているようで、ふごふごと天井に向かって鼻息荒く一人で叫んでいる。

「お婆もずるい人なあ。こんな美味そうな子を太らせて食べようだなって」

かさかさと虫のように四本の足を器用に動かして、天井から壁を伝い畳の上に降りてきた猫は、軽くステップを踏みながら、畳を歩く。

綺麗な三毛猫だ。白の毛は新雪のように白く、黒は墨のように純粹で、茶色は漆の塗られた柱のように濃い。

一見無条件で抱きしめたいような外見の三毛猫なのだ。だがその猫が人の言葉を喋っているのだ。

「でも腕の一本や二本くらい食べちゃってもバレないよなあ。そうだよなあ」

妙に間延びした声だが、言っていることは物騒なことこの上ない。しかも舌舐めずりまでして、ゆっくり近づいてきているのだ。

少女はひっと小さな悲鳴を上げると、お膳を蹴飛ばして後ずさりした。盛大音を立てて、膳はひっくり返り粥は畳に零れる。

「ん？ んんんん？」

中身を半分ぶちまけたお椀は、凶ったかのように猫の前を転がる。猫は首を傾げて、零れた粥に鼻をくつつけて臭いを嗅いだ。

「これもうまそうだ！！」

そしてパッと顔を輝かせると、湯気の昇る粥を一気に口いっぱい頬張った。一瞬幸せそうな顔を浮かべたのだが、すぐに猫は悲鳴を上げる。

「きゃあああああ！ 熱い、これ熱いよ！」

ピョンピョン飛び跳ねながら、猫は叫ぶ。その一連の流れに、先ほど感じた恐怖が吹き飛び少女は思わず嘔き出してしまう。

しかしあまりにも苦しそうな猫の様子に、慌ててまだ湯呑に残っ

ている水を差しだした。

「これどうぞ」

「熱い！ 熱い！ あつ……なくなつた」

斜めに傾けた湯呑に必死に舌を伸ばしながら、水をすすする猫はまだ湯呑に顔をつっ込んだまま、ポツリとつぶやく。

その声を聞き、少女は安堵の息を吐いて湯呑を元に戻す。

「まったくひどい目にあつた。やっぱり人の子ってのは凶暴だな」

「そんな。私、何にもやってない」

ぶつぶつと愚痴る猫に向かって、少女は思わず言い返す。すると、猫は元々大きな目をさらに広げ驚いた。

「なんだ。僕の言葉がわかるかい」

少女は一度だけ、大きく頷く。

「えーこれは予想外。んー食べなくてよかった。お婆に殺されちゃうとこだった」

猫は目をしばたかせながら独り言を呟き続ける。

少女はなんとなく猫との会話がどこかほつれている感じがして、僅かに戸惑った。こちらの言葉を聞いているのに、返ってくる言葉は全て独り言。そんな矛盾を感じていてたのだ。

「あの、聞いていいかな」

恐る恐る少女は尋ねる。

「どうだろう。いいかもしれないけど、答えられないかもしれない。キミはここに来たばかりだろうけど、僕は頭が悪いからね」

「……ここ、どこ？」

「どこと言われても。僕にとっては狩り場。皆にとっては故郷。お婆にとっちゃ世話焼くところだね」

やはりそうだ。ざらざらの赤い舌で毛を舐めながら質問に答える猫は、全くこちらを見ていないし話は聞いてくれても、わからせるように話してはくれないのだ。

せっかく話し相手が来てくれたのに、とても大きな隔たりがまだあるようで少女の表情は僅かに曇った。

焦りからか、少女の口調が無意識のうちに荒くなる。

「全然わからない！ もっとちゃんと教えてよ」

「何怒ってるのさ。体に毒だよ」

マイペースを崩さない猫は、少女の目を見ようともしない。

「あなたは誰？」

「知りたい？」

「知りたい」

「僕さっきまで君を食べようとしてたんだぜ。しかも君はすつごく驚いてたし」

「そんなの関係ないよ」

鼻息荒く言い返す少女に、猫はうんざりしたのだろう。面倒くさそうに、うーん。と唸った後、口元を持ち上げ意地悪な笑みを浮かべた。

「じゃあ君の名前から教えてくれよ。よく言うじゃない他人の名前を聞くときは、まず自分からって」

「わかったよ。私の名前は……あれ？」

自分の喉を押さえるようにして、少女は呆然とする。

目を覚ましてからずっと感じていた違和感を、少女は思い出した。正体も今、わかった。

名前がわからない。自分の名前が出てこないのだ。

「ん？ どうしたの早く言ってよ。じゃないと僕も名乗れないよ」

悪戯っぽく言う猫は、少女の息が乱れたことに気づけない。

少女の瞳から、大粒の涙がこぼれ出す。かつてない恐怖が、少女を押し潰していた。不安でいっぱいだった胸も、今はぼっかりと穴が開いてしまったようでひどく寒い。

喉まで出かかっている言葉を必死で絞り出そうと、両手を首にかけるが、出てくることはなかった。

ついに少女は泣き出してしまった。大きな瞳から溢れた大粒の涙は、真っ白い布団に小さな染みを作る。

ここまできてようやく猫は少女の変化に気づく。そして慌てて、話しかけた。

「あわわわ、なんで泣いてるんだよお。勘弁してしてくれよ、お婆に見つかったら折檻されちゃう」

うろたえる猫は情けない声で少女に訴えるが、隠そうと目を覆った手のひらから、涙は零れ落ちる。

大事な、大事なものを忘れてしまった。

ぽっかりと開いた穴の中を、ひゅうひゅうと風が通り抜ける。

「そ、そうだ。自己紹介するよ。僕はネコマタ。ほら、尻尾が二本あるだろう？」

苦し紛れに猫は話を続け、渋り続けていた割にあっさりと名乗る。ついでに付け根から別れている茶色のまだらの尻尾をぱたぱたと揺らした。

少女は覆っていた両手をようやく目から離す。涙はまだ零れて、瞳は真っ赤に充血しているが、それでも幾分ましになったようだ。

「ほんとだ……不思議」

「不思議じゃないさ。ここじゃ当たり前」

ころころと変わる少女の表情に、若干疲労感を感じながらも猫又は尻尾を動かし続ける。おもむろに伸ばしてきた少女の手は、猫又の柔らかい毛並みに触れ優しく撫でた。

あまり触れられることが得意でない猫又だったが、それで少女の気が紛れるならと、じっと我慢する。

しばらく無言の時間が一人と一匹の間を流れた。

「ねえ猫又さん。私、戻りたい」

「え？ 何言ってるの」

「帰りたい」

か細い声。だがそれに含まれる意思是固かった。

「いやいやいやいや。考え直しなよ！ 今の君が外に出たら、食べられちゃうかもしれないよ！」

「それでも……」

「君がいた場所は？ 帰る場所は？ 待ってる人の名前覚えているのかい？」

猫又は少女にたたみ掛ける。

自他共に認める怠け者で、賢くもない猫又だ。寝たければ寝る。腹が減ったら食べる。楽しいことは大好きで、つまらないことや大変なことはやらない。

好きなことを好きなだけやればいい。そんな考えの持ち主なのが、さすがに少女の決断には待ったをかけざるを得なかった。

少女の体からはまだ美味そうな人の香りが仄かに漂っている。

これより外に出ようとなると、自分よりもっと野蛮な連中が至る所を闊歩しているのだ。とてもじゃないが、喰われずに済むとは思えない。

そして何よりも、この少女をお婆が手厚く保護しているのだ。理由はわからないが、みすみす食べさせてしまって、自分と少女の関わりがバレると大変なことになる。

猫又は自分自身の危機感是非常に敏感だ。

「どうだい。あまりにも大変だろう。いいじゃないかここにいればご飯も出る。暖かい寝床もあるんだ。場所もわからない帰路に就く理由なんてないんだよ」

黙り込んだ少女の体が揺れて、猫又は満足そうにうなずいた。

「そうさ。君は人だろうけど、どんな人かもわからないんだろ。そもそも帰れるかもわからない。ならここで幸せになる方がいいって」

「でも、それでも私は帰りたい！ 誰かが待ってる気がするの。私もその人に会いたい。だから帰りたい！」

半ば叫ぶようにして少女は訴える。猫又に優しく添えられていた手は、今は固く握られている。まるで少女の意思の固さを見せつけられているようで、猫又は言葉を失う。

小さな体が小刻みに震えているのは、きっと猫又が散々脅した結果だろう。少女自身、確かな恐怖を感じているのだ。

それでも少女は進もうとしている。

恐怖や不安に押しつぶされそうになりながらも、確証のない未来へと歩み出そうとしているのだ。

そんな少女の様子が真新しく、猫又は眩しいモノを見るかのように目を細めながらも、しっかりと少女の顔を見つめた。

濡れた瞳に小さな決心の火を灯す齡十歳前後の少女。

猫又は大きいため息を吐いた。そして美味そうな香りに誘われて、このことこの部屋にやってきた自分と運命を呪った。

誰に尋ねずともわかっていた。

きっとこれは大変なことになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5681p/>

九十九物語

2010年12月20日01時55分発行